

氏 名	津端 由佳里
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第 384 号
学位授与年月日	平成 24 年 6 月 26 日
審 査 委 員	主査 教授 並河 徹
	副査 教授 鈴宮 淳司
	副査 臨床教授 矢野 修一

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

肺の pleomorphic carcinoma (PC)は全肺癌の 1%に満たないまれな腫瘍であるが、悪性度が高く予後不良であることが知られている。申請者は PC には血痰や血性胸水をしばしば伴うことから、この腫瘍では血管新生が亢進しており、それが予後不良の原因になっているのではないかと仮説を立て、これを検証する目的で本研究を実施した。全国の施設に依頼して自験例も含めた 75 例の PC 症例を収集し、血管新生に関与する vascular endothelial growth factor, hypoxia inducible factor 1 α (HIF-1 α), cyclooxygenase 2 の腫瘍内での発現を免疫染色による形態学的半定量法にて評価するとともに、腫瘍内血管新生の程度 (microvessel density, MVD) を形態学的に評価した。これらはいずれも正常組織に比べて PC で明らかな高値を示したが、これらの因子と予後との関係を多変量解析にて評価したところ、病期や初発時の症状の有無が有意な要因となったものの、血管新生に関連する要因は独立した予後因子とはならなかった。次に、患者背景を合致させた腺癌 (AD) 症例 55 例との比較を行ったところ、PC では HIF-1 α の発現と MVD が AD に比べて有意に高く、予後も有意に不良であることが明らかとなった。以上の結果は、preliminary ではあるものの血管新生が PC の予後に影響を与えていることを示唆しており、まれな腫瘍を多数収集したこともあわせ、PC 研究の端緒としての十分な学術的意義を有している。